２１世紀の日本のかたち（６４）

—大学の国際化とグローバル人材の育成（２）—
国際学会の活用

戸沼幸市
＜(一財)日本開発構想研究所 代表理事＞

１．地球の心配屋の集り

ＷＥＳ（The World Society for EKISTICS（エキステイックス））

私は地球人吉阪先生の生徒でしたから、日本の建築、都市、国土計画についての勉強も地球儀を見ながらのもので、「人類・人間と居住」「グローバルな視点から”国”を考える」といった課題と一体のものでした。

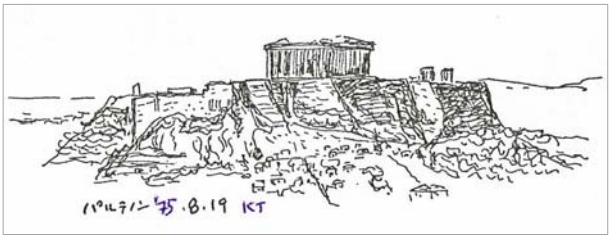
私は早稲田大学都市計画系研究室の助手時代1968～70年、明治100年を記念した政府主催の「21世紀日本の国家・国土像」を求めるコンペティションに早稲田チームの一員として参加し、国連をアメリカ・ニューヨークから南極に移すべしなどを含む提案、早稲田案を取りまとめました、その後、助教授に任命され、学生の研究指導に当たりました。

早稲田大学では教員に対して、１年間の海外研究の制度があり、私もこれを利用して1975～76年、ギリシャに留学しました。

ギリシャはアテネにあるEKISTICS（ギリシャ語で人間居住の意味） Center of Athensを研究拠点としました。ここには大学も併設されておりました。私は1967年ＵＩＡ（国際建築家協会連盟）の大会がチェコスロバキアのプラハであった際、アテネのエキステイックス研究所に立寄ったのですが、その時に対応してくれたのがＷＳＥの機関誌、EKISTICSジャーナルの編集責任者のジャクリーン・ティルウイトさんでした。持参していたＵＩＡでの発表論文「Network City JAPAN」を早速、ジャーナルに載せてくれました。

この縁もあって、アテネの研究所の世話になることになったのですが、地球大の人間居住といった大きな課題に取組む研究所がアメリカなどではなく、ヨーロッパ文明の発祥地、ギリシャにあることに興味をもったのです。なにしろアテネの街のどこからも、私の下宿の物干場からも、学生時代に教科書で習ったアクロポリスの丘に立つパルテノン神殿が見えるのです。

パルテノン

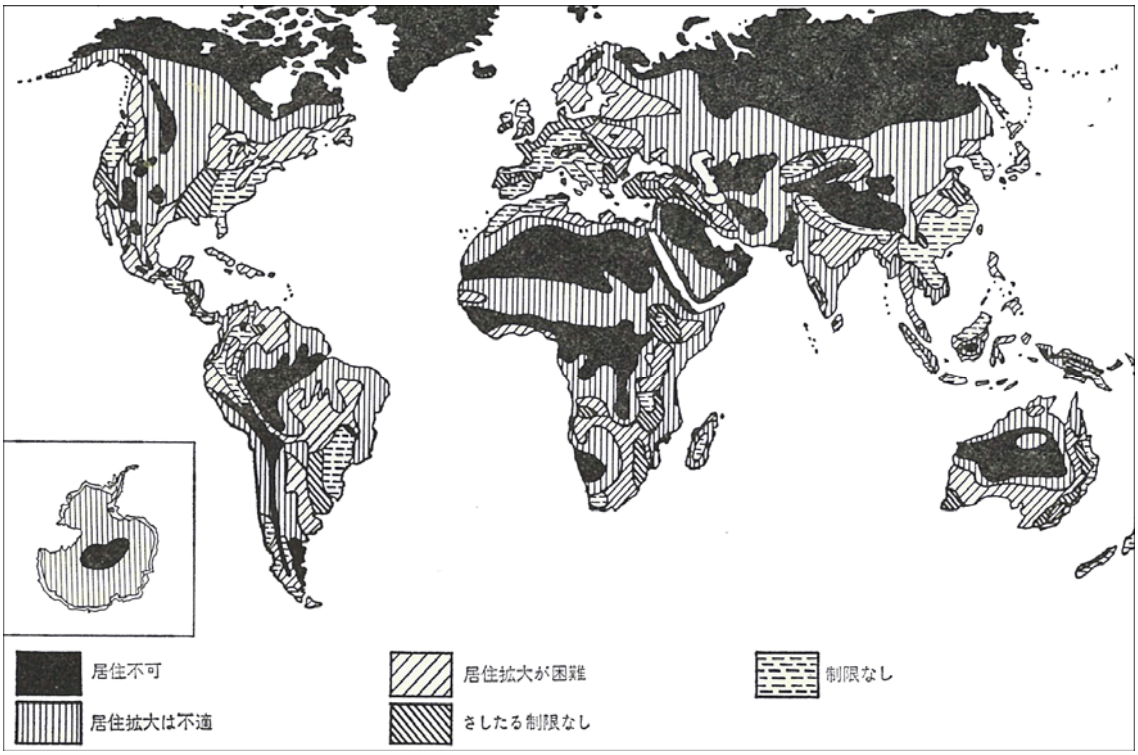


Ekistics Center of Athensは住宅から都市ー地域ー国家ー地球大に至る人間居住の問題に関し1960年代から、創立者コンスタンティノス・ドキシアディス（私の滞在中に死亡されましたが）を中心に世界各国から学際的に研究者が集まって討論し一定の成果を上げて来たところです。そして、World Society for

Ekistics の事務局を兼ね世界中のこの方向の学者、実務家の溜まり場となっていたところです。

この研究所において印象的であったことは何枚もの世界地図が壁一面に貼ってあったことです。これには地球における主な土地利用－可住地・非可住の区分、気候、気象、20 世紀、21 世紀、22 世紀の世界人口の試算が記入されておりました。

エクメノポリスが想定した世界の可住地・非可住地



出典：『人口尺度論』戸沼幸市、彰国社、1980 年

２．ローマ・クラブの「成長の限界」

1960 年代、70 年代、人類・人間居住の場としての地球の限界についての認識が広がっておりました。

バックミンスター・フラー「宇宙船地球号」において地球の限られた資源を人間はシェアしなければならない。バーバラ・ウォード「かけがえのない地球：人類が生き残るための戦い」において 120 もの異なった国々の、地球に対して全く責任のない主権は、地球規模の社会のあり方に有効な働きかけができていない･･･などの発言が続いておりました。

地球の将来をイメージする際の手掛かりはまず「人口」ですが、これについては 1972 年にローマ・クラブ（The Club of Rome）が“人類の危機”レポート「成長の限界」*[1]を世に問いました。当時の時代状況の中で幾何級数的に増加する世界人口見通しに対して、「ローマ・クラブの見解」の章で以下のように示しております。

「世界環境の量的限界と行き過ぎた成長による悲劇的結末を認識することは人間の行動、

さらには現在の社会の全体的構造を根本的に変えるよう新しい形の思考をはじめるために不可欠のものであることを確信する」

「問題の核心は、人類が生き残れるかどうかにとどまらず、無価値な存在に堕することなしに生き抜くことができるかどうかということであるである」*2

地球は燃えつきるか、有限な地球

３．ECUMENOPOLIS（エクメノポリス）
ディストピアかユートピアか

ローマ・クラブなどヨーロッパやアメリカで1960、70年代以降、国々を越える共同体として地球における人類の在り方が問い直される状況がありましたが、この時代状況の中で、ギリシャ人コンスタンティノス・ドキシアディスが音頭をとり、アーノルド・トインビー（歴史家）、バックミンスター･フラー（建築家）、バーバラ･ウォード（社会学者）、ジャクリーン・ティルウイト（都市計画）、ジャン・ゴートマン（地理学者）他、学際的、国際的に研究者が集まり世界 EKISTICS 学会を立ち上げ、地球の未来像を画くという野心的な試みを始めました。

この国際学会には日本から磯村英一先生が熱心に参加し、後に会長を務めております。

ドキシアディス達の研究の成果の一つは“ECUMENOPOLIS・究極の地球居住（1974年）”に集約されておりますが、地球における人口200 億人を想定し、これが居住する地球の土地利用は生態系的に厳密に管理されるべしというものでした。

ドキシアディス達はこれを国連に持ち込み、「国際連合人間居住計画（国連ハビタット）」をつくって地球環境問題を国際的に議論する足掛りをつくりました。

世界人口についての未来予想データでは当時22世紀、200億人を越えるというものでしたが、ドキシアディス達は200億人でも可能な人間居住の筋道を模索しておりました。そして、ここで特に問題としたのは圧倒的に進展すると予想される交通・情報ネットワークによる地球におけるボーダレス居住の問題でした。

「国」という単位、地域を越えて移動、流動する 21 世紀のボーダレスな人間の動きについては、21 世紀、宗教問題も背景にあり、民族紛争につながる大問題であることを予想し、この対策は最も難しく対応策が見出しがたいというものでした。

人口尺度論

ドキシアディスが地球の未来が「ユートピア」か「ディストピア」かと、デルフィの神殿前で悩んでいた姿が目に浮かびます。

私が在籍していた1975年にはＷＳＥのメンバーが集まる年１回のシンポジウムが夏のア

テネであり、これには私も参加して面白い経験をしました。

トータルテーマは、「Action for Human Settlements」でした。この会議は各国から100 名程の大学人、学者、実務家が集って、地球大の居住問題を論じ合ったもので、その成果は翌年カナダのバンクーバーで開かれた第２回国連人間環境会議に反映されました。

シンポジウムは船を借りて１週間ほど地中海の島々を巡りながらのもので、ギリシャを楽しみながらのシンポジウム(饗宴)でした。

日本からは私の他に磯村英一東洋大学学長、川嶋辰彦学習院大学教授他が一緒でした。

私はこのシンポジウムで多数の研究者と知り合うことができ、そのネットワークに乗ってその後、方々の国をたずねた際、研究面や生活面で少なからぬ便宜を得たことでした。

私はアテネの研究所に籍を置きながら、週末ギリシャ中を旅行し、スケッチなどをしながら吉阪先生にならって、日本の私の研究室の学生達にギリシャ通信をしたことでした。

そして、人間尺度論に続いて地球を視野に入れた人口尺度論*3のあら筋を書き上げました。これにはアメリカのハーバード大学教授の経歴を持ち、ドキシアディスを支えたティルウイットさんが議論の相手になってくれました。

私は 1976 年ギリシャから帰国して磯村英一東洋大学長、本城和彦東大教授、長島孝一・キャサリン夫妻他と日本における「日本居住学会（日本エキスティクス学会)」を立ち上げ一時期私の研究室が事務局を引き受けて 20 年程活動を続けました。

1993 年には戸沼研究室主催・日本居住学会共催で、国際シンポジウム「地球 100 億人時代の人間居住」を早稲田大学国際会議場（井深記念ホール）で開催しました。これには各国からの留学生も参加し、活発な議論が展開されたことでした。

４．ＷＳＥの現在

ＷＳＥにはヨーロッパやアメリカに加え、アジア諸国、インド、中国、韓国他からの大学人、研究者が参加し、今日に至るまで各国の大学、研究所をネットワーク化しながら各国持ち回りで様々な主題を設定してＷＳＥ集会を開催しております。

2005 年には古くからの会員である長島孝一・キャサリン夫妻、滋賀県立大学の土井嵩司､そして早稲田大学の後藤春彦(現副会長)、関口信行（理事）と私が世話役となり、日本（彦根）集会を「グローバリゼーションとローカリゼーション」を主題に開催しました。

この集会にはギリシャを始め各国から多数の参加者があり、地元彦根の市民、学生達の熱心な参加もあり、おおいに盛り上がったことでした。*4

最近のＷＳＥ集会は、次の通りであり、私の「理事長の部屋」第 11 回、第 23 回、第 36 回、第 37 回に報告しております。

最近のＷＳＥ集会

集会	テーマ
2008 年 中国（南京）集会	調和的都市化
2009 年 トルコ（アンタルヤ）集会	都市化の未来
2010 年 インド（ムンバイ）集会	望ましい人間居住

注）中国集会は、国連ハビタットの一部として開催された。

５．グローバル時代の国土計画の教材づくり

「大学におけるグローバル人材の育成」については、学生の教育にあたる教師、大学人

のグローバル体験が大きな意味を持つと考えます。

私の場合は人間の地球居住のあり方をテーマとする国際学会ＷＳＥとの係りを通して結果的に広く各国の人々とつながり、そこに留学生を含む学生を巻き込んで教育と研究に当たったということになります。

ＷＳＥの半世紀を超える活動の成果はグローバル人材育成のための教科書といえますが、21 世紀も 10 年代に入りグローバリゼーションの諸相が一段と複雑化しつつ進展しているように見えます。

私の専門領域である都市・地域・国土計画においても人口問題、自然災害問題、原子力発電災害問題など国際的に新しい取組みが求められております。

今、ＷＳＥの若手と議論しているのはこの方面のグローバル人材育成のための教材、教科書づくりです。

当日本開発構想研究所において国土交通省国土政策局の委託により、平成 18 年から「世界各国の国土政策」を現地におもむき調査を続けております。

アジアでは中国、インド、インドネシア、韓国、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、タイ、ベトナム。

欧州では、ＥＵ（欧州連合）、デンマーク、フランス、ドイツ、イタリア、オランダ、スペイン、イギリス。

これらの調査結果については、「各国の国土政策の概要（An Overview of Spatial Policy in Asian and European Countries）」として国土政策局ホームページ*5で順次報告されております。

グローバル人材育成と関連し、グローバルな視点から“国”を考えるための教材の一つと考えております。

2013.7.25

---

*1 成長の限界－ローマ・クラブ「人類の危機レポート」ドネラ・Ｈメドウズ、他著大来佐武郎監訳　ダイヤモンド社 1972.5

*2 ECUMENO POLIS－the lnevitale City of Future C.A. Doxiadis and J.G.Papatoannou Athens Center of EKISTICS　1974.5

*3「人口尺度論」 戸沼幸市著　彰国社　1980.12

*4 世界エキスティクス学会 2005 彦根大会報告書「EKISTICS Vol.73,436-441」

*5 国土政策局ホームページ　http://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/international/spw/index.html